

# ワインズバーグのエッセイの木

森 田 勝 治

(受付 2002年10月10日)

## I

前書きも含めてワインズバーグ物語25編のうち、第7話から第10話までの4話は『信心』“Godliness”という題でまとめられたベントリー(Bentley)家の数世代にわたる物語。オハイオ北部の開拓時代に農業を始めて、世紀末あるいは二十世紀を迎えるに至る。

「第一話」は、南北戦争が終っておよそ20年、すなわちトム・ベントリーの末っ子ジェシーが農場をついで20年ほど経ったベントリー家の家族構成とそのひっそりとした暮らし振りから始まる。1885年頃のことである。

家の表のポーチに座り、或いは前庭の手入れをしている4人の老人達。うち3人はジェシーの姉で、残る1人は叔父。いずれも独身で、自立すること無くこの実家に住まい、地味で物静かに、多分強いてそのようにひっそりと暮らしている。他に4人の作男と家政婦1人、知恵遅れの小間使いの女の子、馬丁の少年にジェシーを合わせて12人。部屋数12の屋敷に住み、物音がするのは食事時、ドアの音と小声で交わされる人声のみ。家屋は木造の平屋で、家族がふえるにつれて当座しのぎに建て増したつぎはぎ住宅。今は住人の半数が死亡のため入れ替わっている。稼業の羽振りの良さとは裏腹に、使用人を除けば年寄りばかりでさながら養老院といった様子。

8人兄弟のうちで、結婚して子供に恵まれたのはジェシーだけのようにある。それも結婚後わずか一年で他界した妻が命と引き替えに産んだ娘、ルイーザひとりだった。そのルイーザはすでに結婚し、デイビッドという一人息子がいるが、家を出て町の男と結婚したので、今ここには居ない。

ところで、オハイオ州、クライドの最初の住民の名はジェシー・ベント

ン (Jesse Benton) といい、1820年にニューヨーク州からやってきて、アンダーソンが十代を過ごした家の横手にあった泉のほとりに居を構えた<sup>1)</sup>。おそらくその名を借りて、この物語の主人公の名をジェシー・ベントリーとしたのであろう。

但し、ジェシー・ベントンはベントン家の初代だが、ジェシー・ベントリーはベントリー家の多分四代目あたり。というのは、ベントリー家はオハイオ北部に数世代に渡って暮らしてきたとあるから。

その数世代を史実に照らしてたどってみると、北部の開拓は先ずコネティカット州が独立戦争で荒廃した農地の代替として取得した北東部から始まる。この地域の開拓は1790年代に始まり、北西部の方は1820年に州政府による区画整理が行なわれ、1822年に販売が開始され、1840年には開拓が一段落する。ベントリー家はベントン家と同様ニューヨークからやってきたが、ベントン家がニューヨークから直接北西部に移動したのに対して、ベントリー家はいったん北東部で開拓を試みて、二代目が北西部の現在地に根を下ろしたと考えられる。実際クライドの開拓時代はそのいずれかの過程でニューヨークからやってきた人々が大部分を占めた。

開拓当時この一帯は湿地で、鬱蒼と樹木に覆われており、開墾は伐採と灌漑に始まり、困難を極めた。しかし三代目のトム・ベントリーが農場を引き継いだ頃には開墾の難事業はほぼかたがついており、600 エーカーの農場を経営して、家族も 5 人の息子に 3 人の娘と大家族になった。この時期

- 
- 1) Altho we don't know when the first white man saw Clyde or camped here, we do know who the first one was that stopped long enough to take out his axe and build a cabin and move his family in to what is now the Village. He was Jesse Benton. The year was 1820. He built a crude cabin by the side of a clear, bubbling spring, the remnants of which can still be seen down on Spring Avenue, adjacent to the house where Sherwood Anderson used to live and where Bill Dunigan now lives. ("These Things Stay By You," *Whirlpool Parade*, Clyde, Ohio, 1966)

ただしベントンはここに住んだのはほんの二、三ヵ月。酒一樽と引き替えに80 エーカーの'squatter's rights'を人に譲って引っ越しており、コミュニティの建設に関わったかどうかは定かでないが、義理の息子がこの辺りで農業を営んだ。

を1940年代とみれば、それから60年余り、4世代にわたる家族の盛衰が4部に渡って語られる。

三代目のトムの家族のうち、末っ子のジェシーを除いて息子達は遅しく育ち、酒に酔って父親を殴り、瀕死の重傷を負わせたのもいたが、しらふの時には身を粉にして農作業に励んだ。

やがて南北戦争が始まると、上の4人の息子達は戦場におもむき、戦争が終る前に4人とも戦死する。一方、兄達と違い、小柄で華奢なからだつきのジェシーは牧師になるべく18才でクリーブランドに出て学業に専念していたが、兄達について母親も他界し、父親は傷心のあまり痴呆気味となったので、やむなく22才で帰郷して崩壊寸前の農場を引き継ぐ。

世が世なら思いもかけない男が牧師の服装で農業を始め、これまた意外なことに大成功して、界限きっての大農場に発展する。

元来が真面目でひたむきな性格のジェシーは、神と聖書に対しても精魂こめて取り組み、神への忠誠心が神の下僕としての自負心を生み、自分は「超人」“an extraordinary man” (*Winesburg, Ohio*, Viking, p. 69, 以下引用ページは数字のみ記す) だと自惚れて、想いは旧約聖書の時代にさかのぼる。たまたま開拓時代の父祖から受け継ぐことになったこの農場は「新人類」“a new kind of man” (70) である自分が始祖となって「新生部族」“a new race of men” (70) を生み育てるべく神が下さったものだと信じ込む。そうなる则彼の行動はすべて神のお導きによるもので、兄達の死も、父親の病も、さらには都会育ちで華奢な新妻が身重の体で家事と農作業に追われ、お産の後に息を引き取ったのもすべて神の御心に依るものだと納得する。

ところが、傍から見れば彼は「半端者」“odd sheep” (66) と呼ばれる存在で、「時と場所を違えて生まれた者」“a man born out of his time and place” (67) だった。それ故自己を主張したところで相手にされることはなく、また自分でもこれといって自ら求めるものがなかった。然し向学心に芽生え、神を学ぶに至ってにわかに活気づく。ついには周囲の者達を愚かな俗人と

みなし、彼らを導くことが自分に与えられた使命と信じこむ。ここで語り手が口をはさむ。「ジェシーは二十世紀に入って数を増す、半端に強い男のタイプで、他人を統率する力は持っているが、自分を律することのできない男」“Like a thousand other strong men who have come into the world here in America in these later times, Jesse was but half strong. He could master others but he could not master himself.” (68) だったという。実際海の向こうにはそのための独裁者達がいたが、どうやらここでは専門家養成の高等教育がもたらす弊害を訴えてるようにも聞こえる。たとえばワインズバーグで最も羽振りのよい教会の牧師, Curtis Hartman (“The Strength of God”) はジェシーと同様神学校の優等生で、下宿していた下着製造業の資産家の娘に気に入られ、5000ドルの持参金と少なくともそれに倍する遺産相続の約束を得て現職について10年。長身で見栄えもよく、町の人々の尊敬を得ていたが、40才にしてたまたま教会の鐘楼の窓から向かいの家の寝室の女教師 Kate の姿が目にとまるまで、彼の最大の悩みと苦労は日曜日に行なう説教の草案を練ることにあった。根が善良なるがゆえ、神の意志に背くことが体験としてなかったせいでもあるが、神学の知識は豊かだが、肝心の神の声が聞こえてこないのが悩みだった。Kate に情欲をそそられ、姦淫の罪を実感してようやく説教に力が入ってきたが、これでは先が保たない。

医療にたずさわる二人の医師, Doctor Reefy (“Paper Pills”)<sup>2)</sup> と Doctor Parcival (“The Philosopher”) はともに講釈を得意とするが、本業には身が入らず、前者は思索を紙に綴ってまるめて丸薬代わりに用い、後者は酒に溺れて日を送る。

画家を志した Enoch Robinson (“Loneliness”) はニューヨークに出てフランス語を学び、美術学校に入り、「弁舌絵描達」“talking artists” (168) と

2) “Paper Pills” が *Little Review* の1916年6月号に掲載された時、その題名は Doctor Reefy の物語と同様に “The Philosopher” となっていた。二人とも医者というより哲学者。

交わって理論は学んだが、結局広告の挿し絵程度しか描けなかった。

名前すら与えられてない「大学の教師」“one of the instructors from the college” (“Sophistication,” 235) に対する作者の扱いはさらに露骨で、「結婚は金の為」“A scholar needs money. I should marry a woman with money,” he mused.” (236) と、ペダンティックで鼻持ちならない人物に仕立てている。前述の Curtis Hartman の結婚もこれと同類であろう。

一方、神の声を聞くことができるジェシーの営農事業では、この専門教育が功を奏する。「この世の天国」“Thy kingdom on earth” (73) 造りはひとえに神の下僕としてのつとめであって、豊かな暮らしや幸せを望んでのことではない。もともと知的探求心が旺盛なので、南北戦争後の産業主義時代の経済、産業活動の情報収集に努め、農業の機械化、省力化を計って成功するが、利益はもっぱら「天の農地」の拡大に投資して、富を楽しむことはついぞなかった。

これでは成功して当然だが、家族や使用人たちにとってこのようなあるじを持つのは不幸なことで、これまでになく働かされるが、「神の国」造りのための奴隷であって、働く喜びは失われていった。「第一話」の出だしはその様子から始まっている。

ジェシーの抱負はとめどなくふくらむ。ジェシーという名は旧約聖書ではベツレヘムの羊飼イエッセイのこと。しからばエラの谷でサウルに率いられたイスラエル人がペリシテ人と戦っている処へ息子のダビデを派遣するよう、主がエッセイに命じたという故事<sup>3)</sup>に思い至り、ワインズバーグのワイン・クリーク一帯をエラの谷とみなし、その地域に農業を営む人々をペリシテ人に見立てて戦いを挑む。そのためには今夜生まれるはずの我が子はダビデでなければならず、男子誕生を神に祈る。

「第二話」はジェシーの娘ルイーズと銀行家のジョン・ハーデイとの間の一人息子デイビッドの物語。ジェシーは男の子を望み、ルイーズが生まれ

3) エッセイはベツレヘムの羊飼。ダビデはその末っ子。イスラエルを襲ったペリシテの巨人ゴリアテ (Goliath) を投石器を用いて退治して武名をあげた。

る前からデイビッド (ダビデ) と名付けて、「この世の天国」造りの後継者を授かるよう念願していたが叶えられなかった。そのため娘は彼にとってただうとましい存在となる。従って彼女もまた父親と同じように「余計者」“odd sheep” の扱いを受けて育つ。学校で学ぶ為に15才で農場を出たものの、こと志と異なり、結婚してデイビッドをもうける。そのため父親譲りの向学心は無残につぶされ、早すぎる結婚に母性を歪められる。思いやりのある夫は新居を建て、御者付きの馬車を買って与えるなど、ふんだんに物を与えたが、彼女の心をいやすすべは知らなかった。

ベントリーは「狂信者」“a fanatic” (67) だが、その一途さが大事業には欠かせない。しかしそれを受け継いだルーズにとっては災いのもとでしかない。はけ口を求めて薬物を用い、酒に浸り、夫を刃物で脅し、放火をはかるなど、悪女として評判になる。

その母に12才まで育てられたデイビッドは祖父ジェシーの求めにより、農場の後継ぎとして引き取られる。両親のいさかいに耐えるため、「愚鈍」“a dullard” (75) とみられる処世の術を身につけたデイビッドの心は農場に来て解き放たれ、まわりの者達にもその幸せを分かち、祖父ジェシーの心さえ和ませた。

デイビッドはその後母親に滅多に会うことはなかったが、だからといって忘れることはなかった。心の中の母の面影は時とともにむしろ際立ってきた。その面影とは、一度だけ見せてくれた母の優しさに基づいている。

ある秋の日の夕べ、祖父の農場で一日をすごしたデイビッドは、作男に送られて家に戻るが、彼は他に用があって急いでいたのでデイビッドを家の前の路上に降ろして立ち去る。雲が低く垂れ込め、あたりにはすでに宵闇が迫っている。その暗さが我が家と重なるのか、デイビッドはつい入る気になれず、祖父の農場に戻ろうと走り去る。迷子になり、闇の中をさまよっているうちに運良く通りがかった農夫に連れ戻された時、父親らは搜索に出払っており、明かりの灯らぬ家の中に母親だけがいた。そこでデイビッドは初めての体験をする。日頃とは打って変わってやさしくなった母

親の腕に抱かれたのである “For an hour the woman sat in the darkness and held her boy. All the time she kept talking in a low voice. David could not understand what had so changed her.” (77)。望まれずしてこの世に生まれた者どうしがこうやって抱き合う場面が「第四話」にもある。生け贄となるべき小羊とそれを抱くデイビッドの姿である<sup>4)</sup>。

デイビッドを迎える前のジェシーの心は揺れていた。新聞、雑誌に目を通して、“modern industrialism” (81) の動きがワインズバーグにも到来したことを承知していたし、自分でもワイヤ・フェンスを設ける機械を発明したりしていた。耕作によるよりはるかに早く、労することなく利潤を得られるてだてのあること、特に義理の息子の銀行業のように、金で金を得ることに興味を持ち始めていた。この誘惑から彼を救ってくれたのはデイビッドである。再び「天の農場」建設に専念すべく、デイビッドをたてて天に誓いを立てる儀式を思い立つ。ある日、これまでも神との対話に通い慣れた森の中の空き地にデイビッドを伴って行き、神に呼び掛ける。だがこれは12才のデイビッドには通じない。恐怖を感じてその場から走りだし、木の根方に頭をぶつけて昏倒したため、儀式は不首尾に終わる。

「第三話」は「降伏」“Surrender” と副題がついているが、ジェシー・ベントリーの娘ルイーズが15才で農場を出て、その年のうちに結婚という形で降伏に至る話。ルイーズの物語は「意味の取り違えの物語」“a story of misunderstanding” (87) とあり、周囲の無理解、誤解に翻弄されつつ自らも誤解を重ねるうちに、ついには妊娠と誤認して結婚してしまう。

農場を出たのは教育を受ける為で、町に出て父親の知人のアルバート・ハーディー宅に寄宿して、ワインズバーグ・ハイスクールに通い始める。ハーディー家にはルイーズより年上の娘メアリーとハリアット、息子のジョ

---

4) 母子物語、特に母親への思いは、“The Book of the Grotesque” に “and one, a woman all drawn out of shape, hurt the old man by her grotesqueness. When she passed he made a noise like a small dog whimpering.” (25) とあるのを見れば容易に察せられる。老作家がうなされて声を上げるほどの人物はこの女性のみ。

ンがいた。アルバートは教育に熱心で、町の教育委員会の委員でもあったが、娘二人は大の勉強嫌い。それとは知らず気に入られようと勉強に励むルイーズはアルバートの自慢の種となったが、娘たちの反感を買う。彼女らの冷淡さに 6 週間あまり耐えたが、ある夕べ、とうとう我慢できなくなって泣きだした。年令が近くて特に辛く当たる妹のハリアットは「泣いてなどいないで部屋に戻って勉強なさい」“Shut up crying and go back to your room and to your books,” (90) と容赦しない。その年のある冬の夜、味方ほしさに思い切ってジョンに恋文をしたためる。男女の間柄を望んでのことではまっただくなかったが、相手はそう受け取り、2, 3 ヶ月後には懐妊の懸念が生じて結婚に至る。結婚して初めの一年間、彼女は夫に恋文をしたためた本当の理由を理解してもらおうと彼の懐に入るが、そのつど誤解され、とうとう心の思いは語れぬままにデイビッドが生まれることになる。それからというもの、婚前の妊娠が誤解だったことも手伝って、結婚が失敗だったという後悔から夫に辛く当たり、我が子への愛着も屈折して不器用な対応しかできない。

「第四話」の「恐怖」“Terror”は「第二話」から引き続き、デイビッドと祖父ジェシーとの物語。デイビッドが農場に来てから 3 年目の秋、ベントリー農場は例年にない豊作の年を迎える。その年の春、ジェシーは周囲の笑い話になるほど途轍もない冒険をする。新たに未墾の沼地を低価格で購入し、その灌漑設備に莫大な費用をかけ、キャベツと玉葱を大量に作付けする。ところがこれは大当たりで、土地の取得と灌漑等に要した費用を一切まかなったうえ、さらに二つの農場を買い足せる利潤を生み出した。これに気を良くしたジェシーは初めて家族に笑顔を見せる。また、省力化の為の農機を大量に買い込む一方、みずから町に出掛けて、孫のデイビッドには自転車とスーツを、二人の姉には金を与えて、クリーブランドでの信仰集会に出席できるようはからう。

この成功を神に感謝すべく、ある土曜日の朝、いつものようにゴム銃を持って森に出掛けようとする孫を呼び止め、季節外れに生まれた小羊、文



字通りの“odd sheep”を丸く縛りあげたのを抱えさせて、「第二話」と同じ林間の空地に向う。ジェシーの目的はその小羊の血でデイビッドを浄めることにあるが、デイビッドにそれは通じない。か弱い小羊をしっかり抱き締めると、その鼓動と命の温もりがデイビッドにこれを救う勇気を与え、何やら不吉な予感がするが、いざとなったら一緒に難を逃れようと小羊に言い聞かせる。

かくして「天の農場」造りの実現と、さらにデイビッドを自分の後継者として認知するよう神に求めるジェシーの試みは再び失敗に終る。事態を察知したデイビッドは小羊を解き放って自分も走り去る。のみならず、小羊を追ってきたジェシーの額を狙ってゴム銃で撃ち、見事に命中してジェシーは卒倒。死んだと思い込んだデイビッドは泣きながら森を駆け抜けるが、やがて気を取り直し、「ぼくは神の下僕を殺してしまったからにはもう一人前、だから独り立ち出来るんだ」“I have killed the man of God and now I myself be a man and go into the world.” (102) と健気に自分に言い聞かせつつ、足早に畑を抜けて森に入るワイン・クリークの流れに沿う道を、ハック・フィンと同じように西に向い、行方知れずになる。

デイビッドはこの時15才になっているが、祖父を殺害してこれで独り立ちできるとなぜ思ったのか。ベントリー農場に垂れ込めていた暗雲がこれで晴れたから、信仰との絆が断ち切られたから、神の名を借りて実は貪欲な物欲の虜になっていた祖父を退治したから、独裁者を倒したから等々、これが聖書の故事をもとにした寓意的な物語であればあれこれ考えられようが、それでは安易な作り話にしかない。ここは単にデイビッドは我知らず母親の仇をとったのであり、そのことが彼に独り立ちさせる勇気を与えてくれたのだと見るべき。

デイビッドを農場に引き取る話をジェシーと夫のジョンが二人がかりで持ち掛けたとき、それが息子のためと思ったか、ルイーズは予想外に冷静に応じる。そして「デイビッドがいなくなったのちのルイーズに急激な変化が起り、以前ほど夫といさかいを起こす気もなくなった様子だった。ジョ

ン・ハーディは結局これで万事めでたく治まったのだと納得した」“The loss of her son made a sharp break in her life and she seemed less inclined to quarrel with her husband. John Hardy thought it had all turned out very well indeed.” (79) とある。これが最後の、そして最も大きな誤解であろう。アンダーソンの描く母と息子の関係、その絆は異常に強靱である。重病で壁伝いに歩かねばならなくなったジョージの母親エリザベスは、夫が息子に「おまえは馬鹿じゃない、女じゃないんだ。お前はトム・ウィラードの息子なんだから、そのうち目を覚ますさ」“You’re not a fool and you’re not a woman. You’re Tom Willard’s son and you’ll wake up.” (“Mother,” 44) と励ましているのを聞きつけて、裁ち鋏みを手にして夫の殺害を試みようとする。親子三人の間のままならぬ関係を清算するには、またそれによって母と子の絆を保つには、夫婦が果たし合いをして共倒れにまで至らねばならぬとエリザベスは思い詰める “He was chosen to be the voice of evil and I will kill him. When I have killed him something will snap within myself and I will die also. It will be a release for all of us. (45)。

子羊を抱くデイビッドの姿は「第二話」でわが子を抱くルイズの写しで、この絆を断ち切ろうとするものは天敵と見なされる。デイビッドが行方知れずになったのち、彼のことが話題になると、ジェシーは天を仰いで神様がお連れになったのだと云い、「それというのもわしが神の栄光を高望みしたためじゃ」“It happened because I was too greedy for glory.” (102) と悔やんだが、実はわが子を奪われた母親の恨みを買ったためと覚るべき。

ダビデはベツレヘムの羊飼、エッサイの末っ子で、イスラエルを襲ったペリシテの巨人ゴリアテ (Goliath) を投石器を用いて射ち殺したが、デイビッドはエッサイたるジェシーを射った。Rex Burbank はこのエッサイ物語を「でっちあげの寓話」“contrived allegory”<sup>5)</sup> と評し、Thurston は「辻

5) Rex Burbank, *Sherwood Anderson*, Twayne, 1964, p. 76

棲の合わない神話の援用」“inchoate mysticism”を批判しているが<sup>6)</sup>、Carlos Bakerは「アンダーソンの根っからの真面目さが時にはほころんで、コメディータッチになることもある」“Anderson’s basic seriousness could sometimes relax into comedy”という<sup>7)</sup>。アンダーソンがみずからはそれと知らぬ間に滑稽な話になってしまうことを言うのであろう。ここではジェシーがデイビッドにゴリアテを退治してくれることを期待したが、自分が射たれ、しかもその射たれた理由を誤解しているところが哀れにも滑稽なのである。アンダーソンの意図はどうであれ、ジェシータイプの男性に対する痛烈な皮肉となっているところが面白い。

ルイーザやジョージの母親が現状からの脱出をはかる冒険は馬車を暴走させる程度のものでしかなかったが、デイビッドは実際に三度脱出を試みて、三度目に成功する。母親に果せなかった脱出願望を息子が遂げたという意味では、ジョージの旅立ちも同じ。だが、デイビッドのその後は容易に察しがつく。霜の降りる季節に生まれた羊に冬は越せまい。類推すればジョージのその後も展望は暗い。

その後間もなくデイビッドの祖父も母も他界し、父親は銀行家として成功する。斯くしてオハイオ北部の新開地に入り、更に西に分け入ってワインズバーグに根を下ろしたベントリー家は、ジェシーの父親トムの時代に三代にわたる苦労が実り、それをジェシーが華々しく発展させたかに見えたが、結局は彼に始まる後半三代に「変わり種」“odd sheep”が続いて斜陽を迎える。これがワインズバーグに先祖代々住む人々の実態でもある。

「第二話」でジェシーが15才のデイビッドを引き取った時、ジェシーの年齢は55才 “Although he was at that time only fifty-five years old he looked seventy” (79-80) とあるから、18才でデイビッドが出奔した時ジェシーは

6) Jarvis Thurston, “Anderson and ‘Winesburg’: Mysticism and Craft,” *Accent*, 16 (Spring, 1956), p. 113

7) Carlos Baker, “Sherwood Anderson’s Winesburg: A Reprise,” *The Virginia Quarterly Review*, p. 574

58才。1865年の南北戦争終決時に22才だったとすれば、この物語の終わりは1901年頃、或いはそれ以前までのことになろうか。ともかく新世紀が始まる境目の頃の話である。

## II

『ワインズバーグ物語』の大部分は“ジョージ・ウィラードが17才でハイスクールを出た後、町で唯一の週間新聞の記者になった夏から、19才の4月に都会へ向けて旅立つまでの、足かけ2年の間の物語。“The Thinker”のセス・リチモンドは18才で、ジョージと同じ年だが、彼がジョージの部屋へ向かう階段で耳にしたジョージの父親トムとクリーブランドからの客との話のやりとりに、1896年の大統領選挙キャンペーンにオハイオから打って出たマッキンレーとその支援者マーク・ハンナについての評定があることから推察すると、ジョージが新聞記者としてワインズバーグにいた期間は1895年6月から1897年4月まで<sup>8)</sup>。

当時10代の主要人物はさらにトム・フォスター“Drink”，ヘレン・ホワイト“Sophistication”が居り、どちらもジョージらと同年輩。従って1896年

- 8) “Here Anderson gives external confirmation that 1895 would be the correct narrative present: Seth recoils from a loud political discussion of the relation of Mark Hanna to William McKinley who became President in 1896.” (Ray Lewis White, “Of Time and Winesburg Ohio: An Experiment in Chronology,” *Modern Fiction Studies*, 25, 1979-80, p. 663)

ここでセスがジョージの父親たちの政治論争を耳にしたのは1895年としているが、これは間違い。マッキンレーが大統領に就任したのは1897年で、1896年の11月に勝利したにしても、この年は選挙キャンペーンの年。この夏、マッキンレーは遊説を行わず、オハイオ州キャントンの自宅前に人を集めて演説する“front porch campaign”の戦法が効を奏して圧勝する。セスの物語はその夏のことである。

面白いことにマッキンレーはジェシーとほぼ同年輩。多分18才の時に南北戦争が始まると、前者は兵卒として参加、後者は神学校に入学。1901年、マッキンレーは二期目を迎えたところでアナキストに暗殺され、ジェシーも相前後してその生涯を閉じる。

には4人が共に18才。またエルマー・カウリー“Queer”もほぼ同年輩と推測される。

彼ら5名のうちエルマー・カウリーとヘレン・ホワイトを除いて、他の3人は祖父母の代から語られており、エルマーにしても祖父の代は農業に従事していたことが容易に窺える。

ヘレン・ホワイトは町一番の金満家の一人娘で、若者たちの憧れの的。母親はホワイト夫人とあるだけで名は与えられていないが、町の矯風活動や世論のリーダー格。父親についても銀行家とあるだけで、名は出てこない。人となりについて語ることもないのであろう。窺い知れるのはこの物語の中で唯一ホワイト家のみが豊かで健全な家庭であるということ。バンカー・ホワイトと並んで銀行家として成功したデイビッドの父親ジョン・ハーディは妻と一人息子を失いはしたが、彼もホワイト一家と共に新世紀の繁栄に参加することになる。

ジョージ・ウィラードの母方の祖父はホテルを経営していたが、一人娘のエリザベスが5才の時妻を病気で失い、家業にも娘の養育にも身が入らない。娘が年ごろになり、宿の客を相手に男漁りをするようになっても諫めることが出来ないまま、娘の結婚を待たずに病死。一方エリザベスは、ホテル経営は放棄して町を出るようにと800ドルの現金を手渡して果てた父親の意向に従わず、従業員のトムと結婚。ホテルを引き継ぐが、彼女も病がちで、息子のジョージが18歳の時病死する。

セス・リチモンドの祖父は石工で、良質の石灰石を産するエリー湖岸に石切り場を所有し、ワインズバーグで最も豪華な石造りの邸宅を息子のクラレンスに残すが、クラレンスは取り巻きの甘言に乗せられて遺産の殆どを投機に注ぎ込んで失い、女教師との噂を新聞に書かれて社主に決闘を挑んだが返り討ちに遭う。残された妻バージニアはそれでも夫を信じて一人息子のセスに父を見習うようにと教え、僅かな遺産と夫の友人が手配してくれた裁判所の速記係として不定期の収入を得ながら慎ましく暮らす。

トム・フォスターは16歳の時、祖母に連れられてワインズバーグにやっ

てくる。祖母に名前は与えられていないが、彼女はもともとこの地の出身で、1軒の雑貨屋を中心に12戸か15戸の集落であった頃に近郊の農場に育ち、学校にも通った。機械工と結婚して農場を離れ、カンザス、カナダ、ニューヨーク市と移り住み、夫の死後は同じく機械工と結婚した娘の処に身を寄せ、シンシナティの対岸、ケンタッキー州、コビントンに住んだ。それから苦難が始まる。娘の夫が労使紛争で警官に射殺され、気落ちした娘が病死する。持っていた貯えは娘の治療費と二つの葬儀に使い果たしたため、やむなくシンシナティに移り、売春宿の立ち並ぶ暗黒街のがらくた屋の二階に孫のトムと間借りして5年間、掃除婦、皿洗いなどの下働きに老いた体を鞭打って暮らす。ある夜仕事の帰りに37ドル入った財布を拾い、身の回りの物を毛布にくるんでトムに背負わせて駅へ急ぎ、故郷のワインズバーグに50年振りに戻る。身寄りはなくなくなっていたが、ホワイ夫人が家事の手伝いに雇ってくれる。

エルマーの父親エベニーザ・カウリーは雑貨屋を営んでいるが、もとは農業を営み、妻の死後農場をたたんで、1年前に町に出て商売を始めたところ。娘のメイベルと息子のエルマーの三人暮らしで、店は息子との共同経営で親子商会になっている。野良着を結婚式以来の一張羅のプリンス・アルバート・コートに着替えて、ビクトリア調スタイルをきめているが、その服装が時代遅れで奇異にしか見えないように、商売の仕方も奇妙。売れるものは仕入れ損ない、売れないものをうっかり仕入れる始末。だからといって生活に困っているわけではない。農場を売った金は商売の元手に使ってもまだ400ドル余り残っている。しかし現在の商売がうまくいっていないように、親の代から引き継いだと思われる農業も、妻が亡くなったせいだと割り引いても結局は不得手でやめている。息子のエルマーは自分がこんな親の子と思われるのが我慢ならないが、彼とて同じ穴のむじな。父親を批判しても、自分が代わって商売をする才覚は持ち合わせていない。

ジョージの母は彼が12才か14才の時すでに不治の病に蝕まれ、セスは幼い頃に父と死別、トムには両親がいなくて、エルマーには母がいなくて。い

ずれも家系をたどれば欠損が特に目立ち、いずれの家庭も祖父の代から落ち目が始まっていると見られる。

落ち目とはいえ、暮らしが立ち行かなくなるまでには至らない。ジョージには不振ながらもホテルがあり、セスには石造りの豪邸があり、トムには何も無いがもともと望む気がなく、半端仕事でわずかな金があれば満足できるし、そのような仕事にこと欠くようなこともない。エルマーは売れない雑貨店の共同経営者であることが不満だが、怒りに任せて無一文で家出をはかるほど、金に困った経験がない。

ワインズバーグでは金銭的に困窮することはない。南北戦争の退役軍人として、夫が亡くなれば妻に年金が入るし、どこかで縁者が死んだからと遺産が転がり込んでくることもある。絵描きのイーノック・ロビンソン“Loneliness”が妻子をもてあました頃、母親が他界して8000ドルを残してくれたおかげで手切金にできたし、雇われバーテンのエド・ハンドビー“An Awakening”は25才の時、インディアナの叔父の大農場を相続し、それを8000ドルで売却し、6ヵ月で使い果して残り少ない青春を謳歌した。エリザベス・ウィラードの父親が、ワインズバーグからの脱出用にと残してくれた800ドルは、壁に塗り込められたまま使われずじまい。開拓時代の苦労は遠い昔のことになり、豊かさの中で暮らして行ける時代になっている。

欠損家庭に育った者は他にもいる。

イーノック・ロビンソンはワインズバーグ近郊の農家で、たぶん営農は作男に任せて、母一人、子一人で育つ。画家を志し、21歳でニューヨークに出て15年すごし、結局はものにならずに戻ってくる。ニューヨークではフランス語を学び、美術学校に通い、クラスメートと結婚して二人の子供を設け、公告会社に挿し絵の職を得たと、田舎出の若者が順調に大都会での生活の場を築き得たかに見えた。しかしやがて家族が重荷になり始め、ひとり暮らしに戻ったものの、母を失った心の傷が当人にはそれと自覚がないままに拡がり、いたたまれずに36才で故郷ワインズバーグに帰る。

ジョージ・ウィラードに性の手ほどきをしたルイーズ・トラニオン

“Nobody Knows” は耳の遠い父親と二人暮らし。恋人の気を惹く為にジョージを三枚目に仕立てたベル・カーペンター “An Awakening” も亡くなった母親に対する仕打ちに恨みを持ちつつ父親と二人で暮らす。またジョージの母親エリザベス、デイビッド・ハーデイの母親ルイーズも父子家庭の一人っ子。

最も短い「タンディー」“Tandy” は同じくトム・ハードとその娘の父子物語。7才までは町外れのぼろ家に不可知論者の父親とふたりで住んでいたがその後行方知れずになったという或る女の子が5才の時に、ひとりの酔っ払いが行きずりにタンディーという別の名を付けてくれたという話。神は存在しないという自説に固執するあまり、トムはほかならぬわが子が神の授かりものであることに気付かぬまま、妻の親類の家にたらい回しに預けてきた。酔っ払いはクリーブランドの金持ちの息子で、誘惑の少ない田舎町ならアルコール中毒を克服出来るかとウィラード・ホテルに逗留していたが、単調な毎日に酒が欠かせず、却って悪くなる。やむなくワインズバーグを去る2、3日前、男はウィラード・ホテル前の椅子に腰掛けた父親と膝の上の女の子に打ち明け話をする。実の処、その男は金には恵まれているが、愛には飢えているらしい。理想の女性像をその子に語り、そうあれとタンディーという名を与え、その子もそう名乗ると駄々をこねて父親を困らせる。ただそれだけの話で、物語りそのものはどうとも評価のしようはないが、片親の子をこれだけ揃えたという点では考えさせられる。

### III

『信心』4話について、アンダーソンが1917年にニューヨーク州北端の避暑地、Chateaugay Lake から Waldo Frank に宛てた手紙に、ここにきて思いは丘を巡る羊飼いの昔にさかのぼり、敬虔なキリスト教徒で「愉快的」“delightful” 老人、ジョゼフ・ベントリー (Joseph Bentley) を主人公とするオハイオの大農場の物語を入れてその雰囲気再現してみたくなったと言う主旨のことが述べられているのを根拠に、Jarvis Thurston はこれはも



ともとベントリー家数世代に渡る独立した物語を書くつもりだったが、それを果せず、結果としてワインズバーグ物語の中に挿入することになったと推測しており、その推測を基に大方の批評は物語の全体的構成を害なうものとして扱っている<sup>9)</sup>。

『信心』4話をアンダーソンが始めから構想していたわけではないことは確かであろう。William L. Phillips に依れば、原稿が手掛けられたのは先ず「第三話」の“Surrender”からで、“Mother”に引き続いて書かれている。すなわちこれは女性・母親物の2作目として、また愛情によらず、はずみで結婚に踏み切ってしまった夫婦の物語として、類似した作品になっている。

- 9) “This supposition is now supported by an August 27, 1917, letter to Waldo Frank, written during the summer Anderson spent in the Chateaugay Lake country in New York:

...My mind has run back and back to the time when men tended sheep and lived a nomadic life on hillsides and by little talking streams. I have become less and less the thinker and more the thing of earth and the winds. When I awake at night and the wind is howling, my first thought is that the gods are at play in the hills here. My new book starting with life on a big farm in Ohio, will have something of that flavor in its earlier chapters. There is a delightful old man, Joseph Bentley by name, who is full of old Bible thoughts and impulses.”

(Jarvis Thurston, “Anderson and ‘Winesburg’: Mysticism and Craft,” *Accent*, Spring, 1956, p. 108)

“Godliness”についてはほかにも Martin Bidney, “Anderson and the Androgyne: ‘Something more than Man or Woman’”, Carlos Baker, “Sherwood Anderson’s Winesburg: A Reprise”, Irving Howe, *Sherwood Anderson* 等が言及してはいるが、いずれも作品の構成上の欠陥、テーマとしても失敗として退けている。これに対して Thomas M. Lorch, “The Choreographic Structure of *Winesburg, Ohio*” は、家族の絆、ひいては社会の結びつきを破壊する要素：男性の女性に対する無理解と愛と性の混同、歪んだ宗教観と物質主義の混合といった『ワインズバーグ物語』のテーマに最も深く切り込んだ作品として他の作品と密接に関わっており、物語の統一性を損なっていないと主張する。また、Ray Lewis White, “Of Time and *Winesburg, Ohio*: An Experiment in Chronology” は“Godliness”四話をもとに『ワインズバーグ物語』を編年体に組み直して、個々の物語を総体的な歴史的視野におさめる機会を提供している。

次に“Nobody Knows”, “Respectability”, “The Thinker” と続き、その後「第四話」の“Terror”が書かれる<sup>10)</sup>。この経過を見ると、4話のうち後半2話が母子物語として先に仕上がっているのである。やがて「第一話」, 「第二話」が副題なしで連続して仕上げられるが、その内容は大きく変っている。前述のように「第一話」は南北戦争から二十年後のベントリー農場の前庭の様子から始まっているが、後半の2話に引きずられて、“delightful”な雰囲気とはまるで懸け離れたものになり、のどかな田園に住む好々爺ジョゼフの姿は消え失せる。またこの変容は主人公の名をジョゼフからジェシーに変えたせいでもある。エッサイとダビデの故事に思い至れば、前半2話は後半2話の歴史的背景として一気に仕上がったとみられる。また、この前半2話はワインズバーグ物語全体の歴史的背景を知るのに実際不可欠の物語になっているので、Thurstonの4話ひとまとめの説には賛成しかねる。

「第三話」のルイズ・ベントリーの物語の冒頭に「ルイズのような女性が人に理解され、生きて行けるようになるには様々な条件が必要だ。思いやりのある物語が書かれる必要があり、周りの人たちの暮らしも思いやりのあるものでなければならない」“Before such women as Louise can be understood and their lives made livable, much will have to be done. Thoughtful books will have to be written and thoughtful lives lived by people about them.”(86) とことわりがあるが、前半2話はそのためのも、すなわちルイズやエリザベスを読者に理解させるために書かれたものであり、またその子供たちのためでもある。

ところで、ジェシーはダビデの父としての役割を負う一方、キリストの祖としてのエッサイでもある。キリストがエッサイの子孫であることを示す系統図は「エッサイの木」(Jesse Tree)として、通例ぶどうの蔓で表わされ、その頂点にマリアに抱かれたキリストが描かれるというが、ワインズバーグでそれを求めるならさしずめリンゴの木。ところがその木に描か

10) William L. Phillips, “How Sherwood Anderson Wrote *Winesburg, Ohio*,” *Sherwood Anderson, Winesburg, Ohio*, The Viking Critical Library, p. 272

れているのはひねたリンゴばかり。「秋に果樹園を歩くと、地面は霜で固くなっており、リンゴはすでに摘み取られている。樽詰めにされて都会へ送られ、書物や雑誌、家具と家族ですし詰めのアパートで食べてもらうのだ。わずかに樹に残っているのは、売り物にならないぶかっこうなリンゴだけ」

“In the fall one walks in the orchards and the ground is hard with frost underfoot. The apples have been taken from the trees by the pickers. They have been put in barrels and shipped to the cities where they will be eaten in apartments that are filled with books, magazines, furniture, and people. On the trees are only a few gnarled apples that the pickers have rejected.” (36)。

アンダーソンはワインズバーグのリンゴ園で毎年摘み残されるこの「ひねた小粒のリンゴ」“twisted little apple” (36) の歴史的経緯を織り込むという明らかな意図を持って「第一話」, 「第二話」をワインズバーグ物語の中心に据えたと見られる。

ジョージ・ウィラードらが18才の時、ジェシー・ベントリーの孫、デイビッド・ハーディはようやく10代になったばかりと思われるが、いずれも大まかに言って、開拓時代を終えた1840年代に生まれたジェシーの世代から数えて三代目。生活に落ち着きを見せて三代経つうちに、豊かにはなった一方、若者らしい情熱を失い、自分でもそれが分かっている、そのため焦燥感にとらわれることがあるが、その時は独り言をつぶやいてしのぐ。たくましく生きた開拓時代を遠く過ぎて、たまに不幸に見舞われることがあっても、年金もあれば先代の遺産もあるから行き詰まることはない。そうになると、ジョージやセスやトムやエルマーらのように心やさしく臆病で青春の血がたぎることのない、脆弱な世代が育つということになるだろうか。

#### IV

1900年に Tredo-Bellevue 間に高速電車が開通すると、これが通勤電車となり、Clyde は物流の交差点としての役割を終え、Fremont, Toredon といった都市の郊外住宅地的なものになる。さらには自動車時代を迎えてこの傾

向が一層進み、Clyde は Cleveland-Toronto-Detroit の産業ベルトの中に組み込まれた “small town” となる。ワインズバーグの人々の物語もほぼその頃に、Irving Howe の言葉を借りれば「かつて活気のあった町の跡」“a buried ruin of a once vigorous society”<sup>11)</sup> として封印される。

しかし、Irving Howe はこれが単なる「アメリカの村」の物語と限定されるとは考えていないようだ。『ワインズバーグ物語』がよく言われるように「村に対する反乱」“the revolt against the village” だとしても、その意とするところは遥かに本質的なところにある。即ち「この物語が繰り返し訴えているのは、うわべの暮らしの裏を見れば百鬼夜行し、国の平和のもとをたどれば根深い怨恨がある」“Again and again Winesburg suggests that beneath the exteriors of our life the deformed exert dominion, that the seeming health of our state derives from a deep malignancy.” ということ。その意味では単に “the American village” に限らず “the American city” についても言えることだという<sup>12)</sup>。

ワインズバーグは東西南北に鉄道が交差する処。住民はそこに生まれ育った者ばかりとは限らない。クリーブランドからアル中克服にやってきた金持ちの息子 “Tandy”，同じくクリーブランドのスタンダード石油会社の営業マンのジョー・ウェリングズ “A Man of Ideas” やユダヤ人行商人 “Queer” などの一時逗留者もいれば、日雇い労働者たちの居住地もある “An Awakening”。アドルフ・マイヤーズ “Hands” はペンシルバニアから、ウォッシュ・ウィリアムズ “Respectability” はオハイオ州、デイトンから、牧師のカーティス・ハートマン “The Strength of God” はインディアナから、またトム・フォスター “Drink” はオハイオ川に臨む大都市、シンシナティの歓楽街に育った。ドクター・リーフィー “The Philosopher” もドクター・パーシバル “Paper Pills” も、そのほかの弁護士や商工業者たちも町の発展に目をつけてのちに越してきた連中である。

11) Irving Howe, *Sherwood Anderson*, William Sloane Associates, 1951, p. 99

12) 同上 p. 97

森田：ワインズバーグのエッセイの本

これを敷衍すれば、世紀の変わり目のアメリカ人の暮らしの実態を縮図に描いたと言えよう。またそこに至る歴史をさかのぼればおよそ60年。偶然ながらわが国の現在も戦後から数えて現在60年に近い。そこで両者を照合してみると、妙に符合するところがあるから面白い。

## Summary

### Jesse Tree in *Winesburg, Ohio*

Shoji Morita

Anderson's most ambitious experiment in his frequent use of religious mode is the four-story sequence of "Godliness." Despite his efforts, the longest story is frequently criticized unfavorably or generally unheeded of all *Winesburg* stories.

Following closely through the history of the Bentley family who "had been in Northern Ohio for several generations," however, the story reveals, without Anderson's intention perhaps, some humorously gloomy phase of human experience inherent in the materialistic age.

During the summer of 1917 Anderson described his protagonist as a "delightful old man" named Joseph Bentley, "full of old Bible thoughts and impulses." Jarvis Thurston surmised that "Godliness" was the matrix of a novel Anderson recast to form part of *Winesburg*.

The change of name, however, came about before he change a "delightful old man" to a "man of god." It is the known fact in Clyde that the first settler or "squatter" was a man named Jesse Benton. He built a crude cabin by the side of a spring adjacent to the house where Sherwood Anderson used to live. Anderson supposedly hit upon the name and the story unfolds differently. The story of Jesse's family tree might be happily associated with Biblical Jesse tree but Anderson made it an apple tree with full of twisted apples. The burlesque give *Winesburg* a significance which transcends its attachment to a specific time and place.